資料2

薬害（やくがい）ってなんだろう？

そもそも薬には病気を治す働きと、それ以外の望ましくない働き（副作用）があります。
例えば、「注射をしたら、針を刺した部分が少し腫れた」という経験をしたことはありませんか？
しかし、「薬害」と呼ばれているものは、
このような副作用とは異なる社会問題のようです。
それでは、これまでどのような問題があったのか見てみましょう。

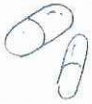
学習のポイント

point 1　薬害にはどのようなものがあったか言えるようにしよう。

point 2　ここで紹介した薬害には、どのような共通点があるのか考えてみよう。

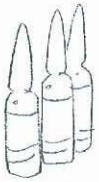
年表

1950　1960　1970　1980　1990　2000



1957（昭和32）年頃～1962（昭和37）年頃
サリドマイドによる障害のある子どもの出生

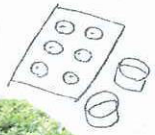
1948（昭和23）年頃
ジフテリア予防接種による健康被害



1953（昭和28）年頃～1970（昭和45）年頃
キノホルム製剤によるスモンの発生

1959（昭和34）年頃～1975（昭和50）年頃
クロロキンによる網膜症

HIV感染のような悲惨な被害を再び発生させないように努力する決意を銘記した「誓いの碑」。



厚生労働省の敷地内に平成11年8月24日建立。

クロロキンによる網膜症

マラリア（亜熱帯・熱帯地域に多い感染症）治療のために開発された「クロロキン」という薬を使った人に、目が見えにくくなるなどの症状が起こりました。製薬会社が薬の危険性について注意を行っていれば、被害を最小限に食い止められたかもしれません。

1973（昭和48）年頃
筋肉注射による筋短縮症

非加熱血液製剤（血液などを原料とする薬で、加熱して滅菌処理をしていないもの）

血液製剤によるHIV（ヒト免疫不全ウイルス）感染

主に血友病（出血したとき、血が止まらなくなる病気）の患者が止血・出血予防の薬として使用していた非加熱血液製剤の中にHIVが含まれていたため、多くの血友病患者がHIVに感染しました（薬害エイズ）。製薬企業は薬の危険性を知りながら販売を続け、国はHIV感染を防止するために有効な対策を取らなかったことで被害が拡大しました。

～1988（昭和63）年頃
血液製剤によるHIV（ヒト免疫不全ウイルス）感染
血液製剤によるC型肝炎ウイルス感染

MMRワクチン接種による無菌性髄膜炎

はしか（Measles）、おたふくかぜ（Mumps）、風しん（Rubella）を予防するワクチンを接種して、多くの子どもが無菌性髄膜炎（ウイルスによって脳の膜に炎症が起こる感染症）などを発症し、重い後遺症や死亡するといった被害も発生しました。製薬会社が国に報告していない薬の作り方をしていたことや国の監督が不十分だったと言われています。予防接種法という法律に基づいて接種されたという点に特殊性があります。

1988（平成元）年頃～1993（平成5）年頃
MMRワクチン接種による無菌性髄膜炎

血液製剤によるC型肝炎ウイルス感染

出産や手術の際に、止血剤として使用されていた血液製剤にC型肝炎ウイルスが入っていたため、多くの人がウイルスに感染し、慢性肝炎や肝がんなどの病気になりました。製薬企業が国に無断で薬の作り方を変えていたことなどが原因で、被害が分かった後の国の対応も遅れたため、被害が拡大しました。

～1997（平成9）年頃
ヒト乾燥硬膜の使用によるプリオン感染症（クロイツフェルト・ヤコブ病）

1992（平成4）年頃
陣痛促進剤の副作用

薬害（やくがい）とはどのようなものなのか 被害者の声を聴いてみよう。

薬害をより深く知るために、被害者の声に耳を傾けてください。
被害者の声を聴いてどのように感じるでしょうか？
そして薬害とはどのようなものなのか考えてみましょう。

薬害スモン被害者　高町晃司さん

私たちを受け入れてくれる社会になってほしい

私は現在49歳です。スモン病を発症したのは4歳の頃。歩行困難は何とか治りましたが視力は戻らず、盲学校に入学することになりました。その頃は、自分が視力障害者になったことをさほど悲観的に考えてはいませんでした。しかし学校を卒業しても就職先が見つかりません。障害の二文字が私に重くのしかかってきました。障害を抱えて生きて行くということは大変なことなのです。私たちは、まだこれから何十年も生きていかなければなりません。これまでは両親が私の治療や教育を最優先にして、私を支えてくれました。しかし、これからは一人で生きて行かなければなりません。私が自立して生きて行くことが、両親の労苦に報いる道だと思っています。そうはいっても将来を考えると決して希望を持つことはできません。もちろん、自立のための努力は続けます。ですから、そんな私たちの努力を受け止めてくれる社会になってほしいというのが、今の私の願いです。

Photo

サリドマイド被害者　○○○○さん

薬そのものに善悪はない―この薬の危険性をよく知って慎重に使用してほしい

私たちサリドマイド被害者は、生涯にわたって多くの犠牲を払ってきました。親が離婚した人、親元を離れて病院や施設で暮らさなければならなかった人がいます。学校でいじめられた人、道を歩いているだけで「あっちに行け」と石を投げられた人もいます。大人になった今も、不自由な体で無理をして仕事や家事をしてきたため、体の不調を訴える人が多くいます。障害のためにやりたいことが出来ない自分が悲しくなります。どんなに努力しても願いが叶わないことがたくさんあります。しかし、私たちはそれを恨んでも道が拓くことはないと知っています。力強く生きることで苦難を乗り切るしかないのです。このサリドマイドが、現在、再び認可され使われています。多発性骨髄腫という血液のがんやハンセン病の症状に効果があることが分かったためです。薬そのものに善悪はない――二度と同じような被害を起こさないために、この薬の危険性をよく知って、慎重に使用してほしいと思います。

Photo

薬害エイズ被害者　後藤智己さん

もっと早く、正しい情報が公開されていれば…

私は生まれつき血友病で、足の関節が痛くなって歩けなくなったりするので、小学校は休みがち、体育はいつも見学でした。血液製剤を使うようになってから出血からの回復が早くなり、活動範囲も広がりました。でも中学時代にエイズウイルスが混入した血液製剤を使い、HIVに感染しました。それを知らされたのは、大学生になってから。うすうす気づいてはいましたが、やはりその時は目の前が真っ暗になりました。以来20年以上、HIVの偏見・差別におびえながら、副作用の厳しい抗HIV薬を飲み続けています。血液製剤にエイズウイルスの混入の話が出たとき、医療者らが情報をきちんと公表していれば、感染せずにすんだかもしれません。すぐにHIVに関する正しい知識を普及させていれば、凄まじい偏見や差別を受けることもなかったのに……。このようなことをまた繰り返さないように、情報を隠さず、またみんなが正しい知識を得て、偏見・差別のない社会を目指してもらいたいと思っています。

Photo

資料2

学習のポイント

point 1　被害者の声を聴いてどのように思ったか、みんなで話し合ってみましょう。

point 2　そして薬害とはどのようなものなのか、考えてみましょう。

薬害肝炎被害者　手嶋和美さん

中学2年の息子に肝炎にかかっていると告げるのは、とても辛かった

1980年、三男出産の時に出血が止まらなくなり、フィブリノゲン製剤を投与されました。米国ではそれより3年も前に、それを使うとC型肝炎になる危険があるので使用が禁止されていました。2年後、四男を出産しました。それから16年、私はC型肝炎を発症しました。肝炎は慢性肝炎、肝硬変と病気が進み、ガンになって死ぬ病気です。中学2年になっていた四男もC型肝炎になっていました。私からうつっていたのです。授業に、部活に、日々充実した中学校生活を送っていた四男。何と説明したらいいのか…何日も悩みました。「そうやろうねえ」四男は覚悟を決めたようにそう言い、黙って自分の部屋に入りました。その日の夕食の時、やけに明るく振る舞っていた子どもの気持ちを考えると…。米国で使用が禁止された時に、日本でも同じように対応してほしかった。そうしたら私たちは、C型肝炎になることはありませんでした。二度と薬害を起こすな。私はそのために精一杯のことをしたいと考えています。

Photo

MMRワクチン被害者のお母さん　上野裕子さん

病気にならないために受けた予防接種で重い病気になるなんて……

娘は1989年（平成元年）6月に生まれました。その頃、MMRワクチンの副作用による無菌性髄膜炎が多発していることをニュースが報じていましたが、1歳10ヶ月になった時、はしかの予防接種を受けさせるつもりで受診した小児科で、「3回が1回で済むから」という医師の勧めを断り切れずにMMRワクチンを接種されてしまいました。その14日後、娘は意識不明となり、重い脳症で大脳細胞が損傷され、歩くことも、話すことも、食べることも排泄することも自分では出来なくなってしまいました。伝染病にかからず健康に暮らしたいと願って受けた注射によって、逆に重い病気にかかったり障害が残ったりすることがあっては何のための予防接種だったのかということになります。特に小さな子どものためのワクチンであれば尚のこと安全性を優先し丁寧に慎重に考えなければならなかったと思います。あの時代にMMRワクチンさえなかったら……今でも残念でなりません。

Photo

クロイツフェルト・ヤコブ病被害者　上野韶彦さん

今でも心のなかで妻を返して下さいと叫び続けています

妻が体の不調を訴えて検査入院、1ヶ月半後に告げられた病名は「クロイツフェルト・ヤコブ病」。この病気は現代医学でも治療法がない100万人に1人の確率で罹患する珍しい病気だと。それはまさしく『死の宣告』でした。病気の進行はとても早く、病名がわかった時には、もはや意思の疎通もできず、寝たきりの状態に。私にできることは、ただジッと妻の顔を見ることだけ…本当につらい毎日でした。診断からわずか7ヶ月後に妻は力尽きて、私を残して一人で旅立ってしまいました。「なぜヤコブ病になったのだろう？」その後、10年前の開頭手術の時に使用された外国製の医療用具（ヒト乾燥硬膜）が原因であることがわかりました。なぜ、病原体に侵された医療用具が流通したのでしょうか。なぜそのような製品の輸入を国が承認したのでしょうか。いのちが粗末に扱われる昨今、妻と闘った日々の記録を一人でも多くの人に伝え、二度と同じ過ちが繰り返されないように強く念じています。

Photo